あなたのたった一言で

中　一

「その服、全然似合っていないよ。ダサくない？」
一人の女の子が笑いながら言う。
「え、ひどいよ。その服の方がダサいよ。」
そうやって、もう一人の女の子も笑いながら言う。
誰もが経験したことのあるような「イジり」。笑いながら言うと、「そんなひどいものではない。」と感じる人は少なくないとは思う。でも、もしかしたら、その「イジり」というものが相手の心の深い傷になっているかもしれない。
私が、小学生だったとき、私のクラスには仲よしグループがあった。休み時間には、皆で話したり、遊んだりしていた。移動教室や登下校は皆で行動というほど、仲がよくて毎日がとても楽しかった。でも、一つだけ「本当に仲がよいのだろうか。」と疑問に感じてしまう点があった。それこそが、「イジり」だった。
ある休み時間のことだった。いつも通りに皆で仲よくおしゃべりをしていた。すると、一人の子が、
「見て。新しいペンポーチ。可愛いでしょう。」
と、とても可愛いペンポーチを見せてきた。
「あ、可愛い。」
と私が言おうとしたそのとき、横から、
「え、ダサい。私だったら絶対に買わない。」
と笑いながら一人の子が返した。そうすると、周りの皆までもが、「うんうん、そのペンポーチ、なんで買ったの。」や「変なの。」など、ひどい言葉で返した。そして、その子は、
「なんで、そんなこと言うの。」
と怒ってどこかへ行ってしまった。私が、
「謝りに行く。」
と声をかけると、みんなは、こう答えた。
『『イジり』なんて当たり前なのにね。なんで、こんなことだけで怒るんだろう。おかしいんじゃないの。』
と……。
次の日の朝、登校の時に、イジられた子は、ただ下を向いて歩くだけだった。私も昨日のままで、まだ誰も謝ったり声をかけたりもしていなかった。学校に着いても、いつも通りに話をしていても、

イジられた子は私たちの輪に入ってくることはなかった。

そんな関係のまま三日ほど経った日。私は買ったばかりのスカートをはいて学校に行った。とても気に入っていた洋服だったので皆がどんな反応をするのか、とても楽しみだった。私が上着を脱ぐと、グループの一人が、

「あ、その服。新しい服。」

と言ってきた。私は気付いてくれたことがうれしかった。けれど次の瞬間その子は、

「そのスカートにそのマークは変だよね。」

とニヤニヤしながら言った。そうすると周りの子たちも笑いながらうなずいた。私は下を向くことしかできなかった。そのとき、イジられていた子の気持ちと自分の気持ちが重なった。皆に笑われて下を向くことしかできない、とても悔しい気持ちに気付かされた。

私はこの出来事があってから、一つ一つの言葉を大切にしようと思った。イジられた子とは仲直りができて、今でも仲よしだ。「イジり」というのは、軽く見えるかもしれないが、一つ間違えれば相手の心に深い傷を残し、いじめにつながってしまう。自分のたった一言で命を奪ってしまうことさえある。だから「イジり」というのは当たり前のことではない。傷つけてしまったその時点で重い罪なのだ。しかし、このように考えると誰も傷つけずに言葉を使うことは、少し難しい気もする。でも言葉を大切にすると相手のことを思いやることができ、そして、それが人権を大切にすることにつながる。人権を大切にすると一人一人が相手のことを考えられる。だからこそ私は、言葉で相手の心に傷をつけないか、自分が言われて嫌なものではないのか、相手の立場になって、きちんとみんなに考えて伝えてほしい。

私たちが言葉を交わさない日はない。今、相手に伝えようとしている言葉は相手を傷つけてしまわないものなのだろうか、自分が受け手として聞いたら嫌なものではないだろうか、思い出してほしい。そして、自分が伝えるたった一言も、使い方を間違えてしまうと、相手の心に深い傷を残してしまうことを思い返してほしい。私も言葉の一つ一つを大切にして、毎日を丁寧に生きていきたい。